

フランシス・トロロプのアメリカ体験

——小説『旧世界と新世界』を読む——

大 井 浩 二

ゲイ作家として知られていたエドマンド・ホホワイトが2003年に発表した歴史小説『ファニー』は、イギリス作家フランシス・トロロプ（1780–1863）が彼女にアメリカ行きを説得させたスコットランド生まれのラディカルな改革者フランシス・ライト（1795–1852）の思い出を語るという形を取っているが、このファニーの愛称で知られた女性のどちらもがほとんど記憶されていない現在の我が国では、それほど話題を呼ばなかったかもしれない。

フランシス・トロロプの場合、息子の小説家アントニー・トロロプの知名度がはるかに高く、1832年に発表されたベストセラー『日常生活におけるアメリカ人の風習』の著者としての彼女は、アメリカ文学史にも名をとどめてはいるが、この印象記が一般に広く読まれているとはとても言えないだろう。ましてやアメリカを舞台とした小説を彼女が4冊も書いているということは、まったく知られていないと言っても過言ではあるまい。『アメリカの亡命者』（1832）、『ジョナサン・ジェファソン・ホイットローの生活と冒険』（1836）、『アメリカにおけるバーナビー家』（1843）、それに『旧世界と新世界』（1849）の4冊だが、ここでは最後の作品を忘却のかなたから呼びもどし、そこにうかがわれるトロロプ夫人のアメリカ意識を再検討してみたい（以下、『旧世界と新世界』からの引用は頁数のみ示す）。

i

『旧世界と新世界』という題名はいささか大げさで、西洋史関係の研究書を思わせるが、簡単に要約すれば、アメリカ西部へ移住したあるイギリス人一家の生活と冒険を描いた物語ということになるだろうか。諸般の事情により、借金生活を送ることを余儀なくされたロバート・ストーモント（以前に兵役に服していたことがあって、キャプテン・ストーモントと呼ばれている）は、妻メアリーと二人の子ども（マーガレットとアーサー）を抱えて途方に暮れるが、同居する妻の従妹キャサリン・スミスの意見を取り入れて、アメリカで農民として一旗揚げることを決意する。キャサリンは富豪のモンタギュー・ウォーバートンと結婚の約束をしていたが、些細なことで仲違いをしてしまったために、多額の貯金をロバートのベンチャーに投資するだけでなく、彼女自身もメアリーたちと一緒にアメリカに渡ることを申し出る。こうして、ストーモント一家とキャサリンは、キャサリンが独断で人選した男女5名の召使たちを引き連れて、ロンドン郊外ベクスリーの住居を明け渡すと、倉皇として大西洋横断の旅に出発することになる。

ニューヨークに到着した直後から、ロバート、メアリー、それにキャサリンの三人は、「新しい世界で新しいホームを探すという、わくわくするような作業」(48)に取り掛かる。イギリスを発つ前に紹介されていた土地ブローカーのエヴァンズ氏と一緒に、列車と駄馬車を乗り継いで、ニューヨーク州北部のハミルトン郡に向かった三人にとって、丸太を横に並べて作った「コーデュロイロード」を「ディアボーン」と呼ばれる馬車で現地まで駆け抜けけるというのは、もちろん生まれて初めての経験で、「コーデュロイロードの揺れがかなり激しいことに彼らが気づいたことを否定するのは不可能だった」(51)と語り手は回りくどい口調で教えてくれる。

だが、苦労を重ねてたどり着いた一行の前に立ちはだかっていたのは、「アメリカの森の荒野」(54)だった。ここでの語り手は「恐ろしい荒野」(53)、

「この土地のぞっとするような姿」(54)、「陰鬱な荒野」(56)といった言葉を繰り返し導入して、開拓者たちを寄せつけようとし、人跡未踏の原野のイメージを読者に印象づけようとしている。これから何年もの間、この「荒廃」(desolation)の風景に妻のメアリーが耐えなければならないと思うと、さすがのロバートの「強く、変わらぬエネルギー」(52)も萎えてしまい、目の前に広がる土地を購入することを断念して、「^{ファーウェスト}極西部」(60)に理想の土地を求めることを決意する。

だが、この『旧世界と新世界』の場面は、『日常生活におけるアメリカ人の風習』の冒頭近くで、友人フランシス・ライトが黒人奴隷のためにテネシー州の奥深い森のなかに建設したナショバと呼ばれるコロニーを、トロロプ夫人とその家族が訪れる場面を思い出させはしないか。そこでもまた、ディアボーンと呼ばれる馬車に乗った一行は、3フィートもある切り株の間を縫うようにして走りつづけるが、「1マイル進む毎に、森はますます深く、ますます陰鬱になってきた」(*Manners* 27)と彼女は報告している。そして、ようやくたどり着いたナショバの「荒野」を一瞥しただけで、「わたしが抱いていたすべての考えは事実から限りなく遠い」ということを発見した彼女は、『旧世界と新世界』におけると同じ単語を使って、「荒廃というのが唯一の感情——頭に浮かんだ唯一の言葉だった」(強調引用者)と「苦痛に満ちた印象」(27)を書きとめている。

この後、トロロプ夫人は、長居は無用とばかりにナショバを立ち去って、メンフィス経由でオハイオ州シンシナティに向かうことになるが、『旧世界と新世界』においてもまた、「極西部」を目指したキャサリンたちが行き着く先はシンシナティだった。現実のトロロプ一家はニューオーリンズに、虚構のストーモント一家はニューヨークに、とそれぞれ上陸場所は異なっているが、「荒廃」した風景を目撃した直後に、いずれもシンシナティを目指しているのは、単なる偶然の一致だろうか。この「西部の驚異」(*Manners* 35)と呼ばれる町にトロロプ夫人が着いたのは1828年2月10日だった(*Manners* 32)が、それから20年後の1848年、アメリカと一緒に旅した娘セリアの看病をし

ながら『旧世界と新世界』を執筆していた夫人は、死の床にある娘のために一家の古い記憶をたどっていたのかもしれない（なお、セシリアは『旧世界と新世界』が上梓された翌 1849 年 4 月 10 日に他界している）。「ファニーは彼女自身の個人の歴史を、ある程度までながら、『旧世界と新世界』において書き直している」（Neville-Sington xxxv）とはネヴィル＝シングトンの指摘だった。

他方、シンシナティに移動した「さ迷える開拓者」（66）キャプテン・ストーモントが、土地ブローカーのカーネル・サイクスの仲介で購入したのは、シンシナティから 10 マイルの距離にあるブルームフィールド丘陵の広大な土地で、四方を森に囲まれた台地だった（73）。あるドイツからの移民の男がそこを開拓したのだったが、資金が底をついたために手放すことを余儀なくされた、といういわくつきの土地だった（76-77）ので、すぐにでも農耕に供することができた。この千五百エーカーに及ぶ土地は、語り手の言葉を借りれば「美しい緑のオアシス」だったが、その「美しい緑の草木と豊かに生い茂った草本植物」（74）が、アメリカで最初に訪れた土地の「恐ろしい荒野」の「荒廃」ぶりと鮮やかなコントラストをなしていることは、あらためて指摘するまでもない。しかも、「森の木々の間に一直線に切り開かれた、長い幅広の道」の中央部からは、「非常に見事な道路を作るかのように、切り株などがすべて注意深く取り除かれていた」（74）という説明は、『日常生活におけるアメリカ人の風習』で陰鬱な「荒野」としてのナショバへの道が切り株だらけだったことを思い出させずにはおかない。

ii

ストーモント一家がイギリスを離れるのと時を同じくして、ロンドンに住んでいるロバートの従妹クレメンティーナも、家族と一緒にパリに移り住むことが明らかにされていた。この時期のパリは「選択する特権を享受するインテリが居住地して選ぶヨーロッパでの唯一の都市」（27）というのがクレメンティ

ーナの意見だったからだが、手紙を書くのが趣味の彼女は何通かのパリ通信を、アメリカに移住した親友メアリーに書き送ることになる。『旧世界と新世界』という作品そのものがアメリカ事情をイギリスの読者に伝えるアメリカ便りの形を取っているのだが、そのトロロプ夫人からのアメリカ便りのなかにクレメンティーナからのヨーロッパ便りが組み込まれる、という仕掛けになっているだけでなく、そのいずれにおいてもヨーロッパとアメリカというコントラストが重要な主題となっている点を見逃してはならない。

このパリ便りの第1信は、ストーモント一家がブルームフィールド丘陵の「新居に落ち着いてから4ヵ月ばかりが経ったところに届いた」(85)が、元々メアリーのアメ리카移住に反対していたクレメンティーナは、「このような世界の進歩の時期」に「アメリカの野蛮な森」のなかに埋もれてしまって、「陰鬱で、荒涼とした状況」(85)から脱け出すことのできないメアリーと、「文明の激しく脈打つ中心部で、まさに心臓部」(85)でもあるパリに身を置いている自分自身とを対比させている。しかも、そのパリでは激しい市街戦が展開し、「輝かしい革命」(87)が進行している。「その時点のパリで演じられている騒然としたドラマ」(88)についての具体的な説明はないが、手紙の日付が184x年となっている点、『旧世界と新世界』の出版が1849年である点、それに物語の結末近くでルイ・ナポレオンが大統領に当選したことが明らかにされている点(213)などから判断して、1848年の2月革命を指していることは明らかだ。

クレメンティーナは、この手紙の末尾で、アメリカの「まだ切り払われていない森」や「野蛮な荒野」(88)にもう一度言及しているが、彼女の意識のなかで、「文明」としての旧世界ヨーロッパと「荒野」としての新世界アメリカという図式が成り立っていることは否定すべくもない。だが、この図式は『旧世界と新世界』の登場人物たちによって、一体どのように受け止められるのだろうか。クレメンティーナのヨーロッパ便りがストーモント一家に及ぼしたインパクトを正しく理解するためには、語り手が指摘しているように、「それを受け取った時点での一家の正確な状況を説明しておかねばならない」(88)。

「美しい緑のオアシス」に移り住んでからの数週間、ストーモント一家は入手した広大な土地の精査に取り掛かる。すでに建っている「醜い小さな家」から「まだ切り払われていない森」（とクレメンティーナの手紙の表現を語り手はそのまま使っている）に至るまで、この「興味ある未知の領域」^{テラ・インコグニータ}（88）を隈なく調査しているうちに、キャサリンは「不毛な荒野にほほ笑むことをまだ教えていなかった」（92）ことを発見し、彼女の「心のなかに数知れない新しい発想、新しい願望、新しい希望が生まれ出た」（92）と語り手は説明している。その結果、彼女は「美しい家を建て、美しい庭を作るという壮大な企画」（97）に挑戦することになる。

キャサリンたちの庭作りにかかる情熱を説明するにあたって、「彼らにほほ笑みかけることを不毛の荒野に教えるのが、彼らの自信に満ちた、理性的な希望だった」（115）と語り手は同じ比喩的表現を繰り返しているだけでなく、掘り起こされた何エーカーもの土が「パラダイスから運んできた庭土に似ていた」（116）とか、キャサリンの花園に植えられた常緑樹の本立ちが「ハマドリユアデス（木の精）たちの永遠のパラダイスにふさわしいようだった」（123）とかいった描写で、パラダイスのイメージを呼び込んでいる。やがてブルームフィールド丘陵に「緑のパラダイス」が完成したことがキャサリンたちによって宣言される（126）が、このような展開は「野蛮な荒野」としてのアメリカのイメージが「緑のパラダイス」としてのアメリカのそれに取って代わられたことを物語っている。

このキャサリンの「本格的な花園」（89）は、すでに述べたように、不毛な荒野をほほ笑ませたい（この比喩的表現は何回か繰り返されている）というキャサリンの「新しい願望」の産物だったが、それが完成するまでには、たとえば霜が地面から消えるまで、「人工が自然に譲歩しなければならない」^{アート・ネイチャー}（115）ときがあった、と語り手が説明しているように、その「緑のパラダイス」は自然から人工によって切り取られた牧歌的空間、ナショバ的荒野とパリの文明のいずれにも属さない世界、レオ・マークスのいわゆる「中間的风景」に他ならなかったことを意味している。『旧世界と新世界』と題するトロロプ夫人のア

アメリカ便りにもまた、たとえばクレヴークールの『あるアメリカ農夫からの手紙』と同じように、「開発された自然、つまり、作られた風景、あるいは人為的操作と自然発生的プロセスの混合した風景」(Marx 112)が描かれているのだ。

他方、オハイオ川を望む断崖の上に完成した「美しい家」は堂々とした3階建ての正方形の建物で、「その最大の特徴は、建物全体を取り囲む完全に均整の取れたドリス様式の柱廊^{コロネード}だった」(131)。さらに、この見事な柱廊で囲まれた前廊^{ポルチコ}は幅が20フィートもあり、豪壮な建物の内部は「建造が難しくて費用がかさむドームではなく、ふんだんに、かつ巧みに配列された天窓」から採光されていた(131)。語り手による「美しい家」の説明はまだ続くのだが、この家を褒めたたえる「称賛のコーラス」が湧き起こり、数多くの見物人が押し掛けるようになった結果、新しい住宅に移り住んでから6週間も経たないうちに、ストーモント一家は「シンシナティの貴族階級の最も有名な家族すべて」(132)と知り合いになった、という記述を紹介するにとどめておく。滞米中のトロロプ夫人がシンシナティで計画したバザーは見事に失敗して、その奇をてらった建物は「トロロプの阿呆宮」(Sadleir 80; Smalley 96 n)と呼ばれたが、それから20年後に書いた小説のなかで、シンシナティの有名人士が足を運ぶ豪邸を完成させることで、夫人はリベンジを果たすことになったと言っておこう。

それはともかく、クレメンティーナからの最初の手紙が届いたとき、「遠いオハイオ川の岸辺の奥まった場所にいるイギリスからの移住者たち」は、「美しい家」と「美しい庭」を完成させて、「最高に楽しい興奮と活動の状態」に置かれていたので、「野蛮な荒野」における「彼らの悲惨な状況を悲しむ彼女の言葉が、明るい哄笑で迎えられたとしても驚くにあたるまい」(98)と語り手は説明することになるのだ。

iii

ほどなくして受け取った「パリの政治」(99)を報告する第2信も、第1信と同じように、「これまで世界の劇場で演じられたことのない最高に高貴なドラマ」(100)に喝采を送り、メアリーたちの「生活の退屈な単調さ」(101)を憐れむ口調の内容だった。この手紙を親しく付き合い始めたウェインライト家の人々と一緒に読んだロバートは、手紙の主が「わたしたちの生活の嘆かわしいまでの単調さ」に同情してくれていることを認めながらも、「パリの最も活動的な暴徒でさえも、心身の機能をわたしたち以上に休みなく、希望をかき立てるような形で発揮しているかどうかは非常に疑わしい」と語り、この意見に賛成するウェインライト氏も「旧世界が新世界に匹敵することなどあり得ない」(102)と応じている。二人のやり取りをキャサリンは「わたしたちの旧世界の偉大さに対する、この威勢のいい攻撃」(102)と呼んでいるが、その背後にアメリカは「緑のパラダイス」であって、もはや「野蛮な荒野」ではないという強い信念が潜んでいることは、あらためて指摘するまでもないだろう。

ブルームフィールド丘陵に完成した「美しい家」と「美しい庭」が評判を呼んだために、キャサリンはシンシナティの有力な銀行家レノルズ氏の家に招かれ、そこに2週間前後、滞在することになるが、ある日、レノルズ家の娘ジェラルディンと二人だけでケンタッキー州側の森に遠出をしたとき、突然の激しい雷雨に見舞われる(141-48)。この日常的な事件を報告するキャサリンの手紙と相前後して、「旧世界と新世界の相違」(148)を強調するクレメンティーナのパリ便り第3信がストーモント夫妻のもとに届く。例によって例のごとく「人類の政治的再生という偉大なドラマ」(148)を賛美してやまない彼女は、「雷雨のときの老婆みたいに暗い部屋に閉じこもっていは、当地で進行している輝かしい仕事の個人的な目撃者になる」(149)ことはできない、と考え、妹ソフィーとともに民衆の群れに身を投じたことを伝えている。雷雨

のイメージを共有するパリ通信とキャサリンからの手紙をストーモント夫妻はほぼ同時に読んでいるが、二つの雷雨のどちらを目撃してみたいのか、というロバートの問いに対して、「地上で生まれた雷雨のほうが恐ろしいだろうけれど、天上で生まれた雷鳴のほうがもっと荘厳だと思う」とメアリーは答え、ロバートもその意見に賛成している（152）。この雷雨や雷鳴をめぐるささやかなやり取りにも、牧歌的空間としてのアメリカの優越性が暗示されている、と言いついてよい。

これまでのクレメンティーナからの手紙は、いずれも革命という「偉大なドラマ」を目撃する彼女の興奮を伝えていたが、パリ便り第4信は非常に短いだけでなく、その調子もかなり悲観的になっていて、軽蔑すべき反革命分子の出現によって風向きがおかしくなったことや、彼女や妹ソフィーの身に危険が及ぶことはないとしても、不安材料には事欠かないことを伝えている（207）。しかも、この手紙が届いてから何日も経たないうちに、手紙の主が妹と一緒に何の前触れもなく、突然、ストーモント夫妻やキャサリンの前に姿を現わすのだ。

「パリから北アメリカの奥地へ」（210）移り住むのを決断したのはなぜか、というロバートの問いに答えて、混乱と無秩序の渦巻くパリで不安な日々を過ごしていたときに、「あなたたちが暮らしている平穏無事な生活」（210）のことを語るメアリーの手紙が届いたからだ、とクレメンティーナは答えている。このアメリカの僻地で「非常に快適で心地よい避難所（place of refuge）」（209）を見いだして、クレメンティーナの元気は回復した、と語り手は説明しているが、新大陸アメリカは早くから「ヨーロッパ社会の複雑さや不安や抑圧を逃れることができる場所」、つまり「避難所」（asylum）だった、とレオ・マークスが指摘している（Marx 87）ことをつけ加えておこう。

だが、すでに触れたように、ルイ・ナポレオンが大統領に当選して、フランスに平和と秩序が回復した、という報に接するや否や、「直ちにパリに引き返すという意図」（215）を口にしたクレメンティーナは、メアリーたちの「ひなびた素朴さとよどんだ静けさ」にそそくさと別れを告げ、「パリの熱気にあ

ふれたサロン」に逆もどりすることになる (218)。彼女がソフィーと一緒に馬車に乗り込む様子を、語り手は「二人の前の長い『旅行』をどう思っていたにせよ、『しかもその行き先はパリだ』というだけで、どんな旅でも楽しくなると感じて、彼女はルソーが語っていたようなエネルギーにあふれていた」(218)と描写している。ジャン・ジャック・ルソー『告白』第4巻の“*un voyage à faire, et Paris au bout!*”という言葉を用いながら、勇躍パリに赴いたルソーの姿を、やはりパリに向かおうとするクレメンティーナ・メイトランドのそれと重ね合わせるの、かなり効果的なレトリックと言えるに違いない*。

だが、このルソーの言葉は『日常生活におけるアメリカ人の風習』においても引用されていたことを、注意深い読者は記憶しているのではないか。ナショバの殺伐とした風景に幻滅した夫人とその一行が、シンシナティを目指したことはすでに触れておいたが、そのときの「わたしたちは『また旅行する。しかも行き先はパリだ』という未熟な若者ルソーと同じ喜びを感じたほどだった」(*Manners* 35)と彼女は回想していた(ルソーからの引用は小林善彦訳による)。もちろん、ここでの夫人はルソーを引き合いに出すことで、単純にナショバの「荒野」を脱出した喜びを語っているにすぎないのだが、目的地のシンシナティがパリと同一視されているということは、彼女自身もまた、クレメンティーナと同じように、アメリカよりもヨーロッパを、「荒野」よりも「文明」を重視していたことを象徴的に物語っている。いや、ヨーロッパとは比較にならないほど生活態度の悪い、あるいは日常マナーの欠如したアメリカを、ヨーロッパの基準に照らして批判することが、彼女のベストセラーの目的ではなかったか。

*ついですが、ペンギン・クラシックス版『日常生活におけるアメリカ人の風習』の編者は、このルソーからの引用の出典を『エミール』と誤記している(*Manners* 332 note 4) ことをつけ加えておく。

iv

『旧世界と新世界』の半ば近く、クレメンティーナのパリ便り第2信が届いたあたりで、ストーモント一家はワタワンガとオラネゴと名乗る二人の先住民に、ウェインライト家で紹介される。「見知らぬ二人の顔色、頭髮、衣服、堂々とした物腰（先住部族の多くにきわめて特徴的だったが）は、現在では訪ねることをお情けで許されている土地の本来の所有者たちの子孫であることを雄弁に物語っていたが、その衣服や態度、それに言葉づかいには、白人の征服者たちのそれにどこか似通っていた」（102）と語り手は伝えている。さらに、ワタワンガについては「純血のインディアン」で、「教育と生活態度に関しては、インディアンよりも白人に近い」（102）ことが彼らの知人の口から語られている。ワタワンガの従弟という触れこみのオラネゴは、実は先住民に扮したキャサリンの元恋人で、彼女のあとを追いかけてアメリカにやってきたモンタギュー・ウォーバートンだったが、この事実は物語の終わり近くまで読者には伏せられている。

オラネゴの服装はワタワンガのそれ以上に白人に近かったが、「長く、まっすぐで、漆黒の髪」は「目を隠してしまうほど額に低く垂れさがったり、肩のあたりまで届いたりしていたので、ハンサムかどうか決め難いほどだった」（102）。さらに、彼の顔はワタワンガよりもずっと濃い赤色で、「全体の印象は、白人風の衣服を着ていたにもかかわらず、連れのインディアンよりもはるかにずっと野性的だった」と説明されている。彼の話す英語もずっと洗練されていたが、「極度にシャイで、いやいやしゃべっているようだった」（102）のは、白人であることを隠すための演技だったと思われるが、彼が先住民に仮装した白人であることを周囲が見抜けなかったのは、いかにも先住民らしい、ステレオタイプ的な変装をしていたからだろう。

この最初の出会いの場で、二人の先住民が口にしたのは、「彼らが属している部族のわずかに生き残っている者たちが、かつて、そう遠くない過去に、彼

らが所有していた土地のごく一部に対する正当な権利」を「平和的で文明化された農業を営む目的」でワシントンの連邦議会に請願しているということだったが、「このほとんど消滅してしまった先住民族の高貴な風貌の残存者を、このように目の当たりしたり、その話を聞いたりすることは、非常に珍しく、刺激的で、絵画的でもあったので、ストーモント、その妻、それにキャサリンは完全に魅了されてしまった」(103)と語り手は説明している。さらに、ワタワンガとオラネゴが立ち去った後でも、ストーモントたちは「彼らの部族につきまとい、奇妙なまでの素早さで地上から消し去る原因となったと思われる悲惨な宿命」について話し合ったが、「しかし、どうすることもできないことを、あの連中は心の底では知っているらしい。そのために生き残った数少ない者たちが一層友好的になっている」とウェインライトがコメントし、一同は「この心休まる、まったく当を得た発言」(105)に耳を傾けた、と語り手は述べている。

この「ほとんど消滅してしまった先住民族」と「白人の征服者」の話題は、その後も『旧世界と新世界』で何回か持ち出されているが、先住民はもっぱら「半ば馴化された森の息子」(103)、「半ば文明化された人間」(126)、「森の野性的な人間」(160)として捉えられ、先住民の「土地を侵略した『青白^{ベールフェイス}顔』の優越性」(104)が強調されるばかりだ。ロバートの息子アーサーが「ヤンキーによって追い立てられる以前に、この土地に住んでいた野性の人々」(122)に関する本をいくつも読んでいる、という記述が示すように、先住民の土地への侵略者はヤンキー＝アメリカ人であることが指摘される一方で、ストーモント一家もまた先住民から土地を奪ったアメリカ人と同じアングロサクソン系であるという認識はどこにも見られない。娘のマーガレットと息子のアーサーが「二人の住み処となった土地の本来の所有者に対して愛情と尊敬を抱きかけている」(121)ので、言動に注意して欲しい、とロバートの妻メアリーがオラネゴに釘をさす場面が用意されているが、「土地の本来の所有者」であった先住民に対して彼女が罪悪感を覚えている気配はまったく見られない。

他方、キャサリンは理想の庭作りに全面的に協力してくれたオラネゴに心か

ら感謝していることを、召使いのジャック・パリッシュ少年に打ち明けているが、彼女の言葉は、『旧世界と新世界』における白人たちの先住民に対する姿勢を要約しているように思われるので、いささか長くなるが引用しておきたい——「あの人は自分が野蛮な種族の人間であり、白人は万事において優秀であることを十分に心得ていて、そのせいで非常にシャイになったり、腹を立てたりすることになる。それはごく自然なことだと思うけれど、わたしたちの状況は全然違っているのだから、わたしたちはそれを実感することはできない。このことを忘れないで、あの人には親切に、敬意をもって接するように」（125）。この彼女の言葉づかいに、先住民に対してトロロプ夫人の登場人物たちが示す「上からの目線の、庇護者的な態度」（Ellis 91）を読み取った『フランシス・トロロプのアメリカ』の著者リンダ・エリスは、「トロロプ夫人は奴隷や先住民に対する虐待について語ってはいるが、白人の優越性を疑問視することは決してない」（Ellis 93）と指摘している。アメリカよりもヨーロッパを、「荒野」よりも「文明」を支持する夫人の潜在的な意識がここにも顔を覗かせている、と言っておこう。

この『旧世界と新世界』における「虐待されている種族」（122, 159）としての先住民の話題は、アメリカを旅するトロロプ夫人にとっても「非常に珍しく、刺激的」だったらしく、『日常生活におけるアメリカ人の風習』でもしばしば取り上げ、ときには非常に激しい口調で、先住民を破滅に追いやった白人種を非難している。「インディアンのあるいくつかの部族の最後の者たちを森の住み処から追い払う法案」（*Manners* 168）が議会を通過したとき、たまたま首都ワシントンに滞在していた夫人は、「この問題における行為でアメリカ人の性格を判断するならば、アメリカ人は名誉と高潔という感情のすべてにおいて、この上なく嘆かわしいまでに欠如している」と書き記し、「不幸なインディアンとの交渉において、アメリカ人は信じられないほどに不誠実で、信義に欠けている」（*Manners* 168）という声は白人自身の間でも聞くことができる、と主張している。

さらに夫人は合衆国滞在中にアメリカ人の「主義と実践の矛盾」を再三目撃

したことに触れて、政治家であれ、牧師であれ、一般市民であれ、アメリカ人はヨーロッパの国々の政府が「強きを助け、弱きをくじいている」と声高に非難しているが、アメリカ国内では「一方の手でリバティキャップを掲げ、もう一方の手で奴隷たちを鞭打っている」姿や、「奪うことのできない権利について、大衆相手に一時間も説教しながら、つぎの一時間で、神聖この上ない条約で保護することを誓った大地の子どもたちを、その住み処から追い立てている」姿をいくらか見ることができる (*Manners* 168)、と皮肉たっぷりに指摘している。

『日常生活におけるアメリカ人の風習』の著者はまた、先住民のための政策を統括するインディアン問題局を訪れたときにも、「この最も不幸で、最も虐待されている種族の置かれた特異な状況」(*Manners* 169)に触れて(「虐待されている種族」という表現は『旧世界と新世界』でも使われていた)、「彼らの生活はもはや定住地を持たない狩猟民のそれではなかった。彼らは農民になろうとしていた」(*Manners* 169)と述べているが、この指摘はすでに触れたワタワングの議会への請願の目的を思い出させる。トロロプ夫人はさらに言葉をつづけて、「残忍な権力者の強引な腕は現在では、以前のように彼らを狩り場や、いつもの水飲み場や、先祖の聖なる遺骨から追いやるだけではない。向上する知識によって快適にすることを学んだ住居、耕したばかりの自慢の農地、汗水たらして育てた作物からも、彼らを追い立てているのだ」(*Manners* 169)と非難している。

このようにトロロプ夫人は「残忍な権力者」としての白人の先住民に対する姿勢を、『日常生活におけるアメリカ人の風習』のいたる所で直接間接に攻撃している。ヴァージニア州アレクサンドリアのメソディスト派教会で、ピークォット族の牧師が「白人の貪欲と飲酒という二重の影響を受けた彼の部族の墮落」を雄弁に語るのを聞いた夫人が、それを「わたしが耳にした最高の説教」(*Manners* 256)と呼んでいるのは、彼女の批判精神の表れに他ならない。別の個所ではまた、「侵略してきた白人たちは、あわれなインディアンたちを彼らの森から追い払うことで、この国の文明化に大きく貢献したのだろうか、と

いう疑問」(*Manners* 305)を口にしてさえもいる。だが、こうした一連の辛口の発言が、『旧世界と新世界』の場合と同様に、「侵略してきた白人」としてのヤンキー＝アメリカ人の非人道性にイギリス人の読者の注意を促すためであったことは否定できない。旧世界の基準にはるかに及ばないアメリカ人を批判攻撃するための具体的な材料として、夫人は先住民問題を持ち出しているにすぎない、という印象は避け難いのだ。

いずれにせよ、『日常生活におけるアメリカ人の風習』の結末で、イギリス人としてのトロロプ夫人は都会や田舎、奴隷州や自由州のいたる所で観察したアメリカ人一般について、「わたしは彼らが好きでない。わたしは彼らの主義が好きでない。わたしは彼らの風習が好きでない。わたしは彼らの意見が好きでない」(*Manners* 314)と高らかに宣言していた。その結果、この1832年に出版されたアメリカ印象記をめぐって、大西洋の両岸で賛否両論の嵐が巻き起こることになったのだ。

V

それから17年後に発表された小説『旧世界と新世界』では、イギリスとアメリカの関係は一体どのように描かれているのだろうか。トロロプ夫人は依然アメリカに対して嫌悪と偏見と軽蔑を抱いているのだろうか。

ある思いがけない事故をきっかけとして、先住民のオラネゴが恋人ウォーバートンの世を忍ぶ仮の姿だったことが判明し、わだかまりが解けたキャサリンはシンシナティの教会で彼と結婚式を挙げると、母国イギリスに引き揚げる。それから5年後、農業経営に成功して、ブルームフィールド丘陵の土地にとどまっているストーモント一家をウォーバートン夫妻が訪ね、ナイアガラ瀑布を一緒に見物するなどして(滞米中のトロロプ夫人もナイアガラに足を運んでいる)、旧交を温めているが、ストーモント夫妻も翌年、家族ぐるみでイギリスに里帰りをすることを約束する。このように家族同士が行き来することで、「旧世界と新世界の両方のさまざまな楽しみを味わう」(223)ことができると

いう言葉で、『旧世界と新世界』は終わっている。

だが、このイギリスとアメリカ、旧世界と新世界の親密な交流を可能にしたのが、19世紀における機械文明の発達に他ならなかったことを、語り手は忘れずに読者に伝えている。ウォーバートン夫妻は結婚してから「正確に5年と4ヵ月が経った5月」(220)のある日、突然、アメリカを再訪することで意見が一致する。「あしたの朝、出発だ」とウォーバートンはキャサリンに告げ、「蒸気がぼくらを数時間でリヴァプールへ連れて行き、蒸気がぼくらを数日でニューヨークへ連れて行く。それから、もう少しの蒸気がぼくらを陸路か、水路か、それとも両方で、ぼくらの愛するシンシナティへ連れて行く」(221)と叫んでいる。この「蒸気」が蒸気機関車や蒸気船を指すことは言うまでもない。

語り手もまたウォーバートンの言葉につづけて、「蒸気はいつもの繊細な正確さで、その仕事をやってのけた。ウォーバートン氏がシンシナティに到着すると計算したぴったりその時間に、夫妻はそこにいた」(221)と説明している。この「蒸気」が旧世界と新世界を結びつけるという主張は、『旧世界と新世界』のかなり早い段階で、クレメンティーナからの手紙にも述べられていた。メアリーに是非ともパリにくるようにと勧めるにあたって、「蒸気はいまや大西洋横断を容易にする強力な手段となっているので、距離は障害になる必要もないし、障害になるべきでもない」(88)とパリ通信の筆者は強い口調で語っていたのだった。

こうした登場人物たちの「蒸気」という文明の利器に対する全面的な信頼を総括する形で、『旧世界と新世界』の語り手は「大西洋横断の旅が以前と比べて非常に容易になった結果、旧世界と新世界の交流が、急速に増大したし、現在もお急速に増大しつつあるというのは、明白かつ非常に喜ばしい事実だ。その当然の、避け得られない結果として、この「大西洋という」とてつもない障壁にもかかわらず、同じ人種から生まれた個人と個人との間に温かく真摯な友情が数多く結ばれている」(134)と語っている。先住民を虐待するアメリカ人に関して、トロロプ夫人は彼らがイギリス人と同じアングロサクソン系で

あったことに一切触れようとしなかったが、にもかかわらず、ここでの彼女がイギリスとアメリカの「同じ人種から生まれた」人間同士の友情を重視する態度を取っているのは、それを生み出した蒸気機関、さらにそれを可能にした機械文明に対する信頼度がはるかに高かったからに違いない。

だが、ここで見落としてならないのは、『旧世界と新世界』の語り手が上記の発言につづけて、イギリスに滞在したことのある「知的なアメリカ人は、男性であれ、女性であれ」、イギリス英語とアメリカ英語の違いに気づくことになり、「古い国〔イギリス〕のアクセントを守り、新しい国〔アメリカ〕の奇妙な声調と表現を忘れる」ことに細心の注意を払っている、と述べていることだ(134)。さらに語り手は「古い国の標準英語からのずれが不快である根拠を新しい国に説明する」ことや、どんなに「活発な感情や鋭敏な観察」の持ち主であっても、それをアメリカ人独特の鼻声や奇妙なアクセントで口にすれば、イギリス人の聞き手は耳を貸してくれないので、「そのような奇癖は社会での真の成功にとって致命的である」ことを「多くの優秀で尊敬すべき人材に伝える」(134)ことの必要性を説いたりもしている。

挙句の果てに、この語り手が口にしたのは、アメリカ人が「たとえばロシア人のように、イギリス人のテューターやイギリス人のガヴァネスやイギリス人の召使いに子どもたちの世話をさせるまでになれば、その子どもたちはロシア人と同じくらい巧みに英語を話すようになるだろう」(134)という大胆かつ無礼きわまりない助言だった。1960年版の『日常生活におけるアメリカ人の風習』の編者ドナルド・スモーリーが、「両国間の自由な交流が可能になった現在、アメリカ人は旅行の恩恵を受けて着実に向上している。やがてアメリカ人は英語の話し方を学びさえするかもしれない」(Smalley lxxiii)と語っているのは、このアメリカ人にとってはいささか屈辱的な語り手の発言を意識してのことであったのだ。

『旧世界と新世界』のトロロプ夫人は、「同じ人種から生まれた」イギリス人とアメリカ人の友情を祝福しているかに見えながら、その実、先住民に対してと同じように、アメリカ人対しても「上からの目線の、庇護者的な態度」を取

りつづけているのではないか。イギリス英語を絶対視し、アメリカ英語を認めようとしないう夫人が、『日常生活におけるアメリカ人の風習』の結末に「わたしは彼らのコトバが好きでない」と付け加えていないのは不思議なくらいだ。本稿の冒頭で触れた二人のファニーを論じる際、ラディカルなフランシス・ライトに対してフランシス・トロロプの保守性を強調するのが一般的だが、旧世界イギリスの伝統にこだわる点においても、彼女がきわめて保守的であったことは否定できないだろう。

1831年にアメリカをやっと引き揚げることになったとき、アメリカ嫌いのトロロプ夫人は、もしかしたら例のルソーの言葉をもじって、「また旅行する。しかも行き先はロンドンだ」と楽しげに呟いていたかもしれない。それから20年近くが経っても、作家フランシス・トロロプのアメリカ嫌いは一向に弱まる気配を見せず、アメリカを舞台とした最後の小説『旧世界と新世界』においても、それはまったく思いがけない、不意打ちといった形で読者の前にはっきりと露呈しているのだ。

引用／参考文献

- Crèvecoeur, J. Hector St. John de. *Letters from an American Farmer*. 1782. New York: Dutton, 1957.
- Egerton, John. *Visions of Utopia: Nashoba, Rugby, Ruskin, and the "New Communities" in Tennessee's Past*. Knoxville: U of Tennessee P, 1977.
- Ellis, Linda Abess. *Frances Trollope's America: Four Novels*. New York: Peter Lang, 1993.
- Foster, Edward Halsey. *The Civilized Wilderness: Backgrounds to American Romantic Literature, 1817-1860*. New York: Free Press, 1975.
- Kissel, Susan. In *Common Cause: The "Conservative" Frances Trollope and the "Radical" Frances Wright*. Bowling Green, OH: Bowling Green University Popular Press, 1993.
- Marx, Leo. *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Garden in America*. New York: Oxford UP, 1964. 榊原胖夫・明石紀雄訳『楽園と機械文明——テクノロジーと田園の理想』研究社出版, 1972年。
- Morris, Celia. *Fanny Wright: Rebel in America*. 1984. Urbana: U of Illinois P,

1992.

Mullen, Richard. *Birds of Passage : Five Englishwomen in Search of America*. London : Duckworth, 1994.

Neville-Sington, Pamela. Introduction. *Domestic Manners of the Americans*. By Frances Trollope. London : Penguin Books, 1997 : vii-xli.

Rousseau, Jean-Jacques. *The Confessions*. 1789. Vol.5 of *The Collected Writings of Rousseau*. Ed. Christopher Kelly, et al. Hanover : UP of New England, 1988.
小林善彦訳, 『ルソー全集』 第1巻, 白水社, 1979年。

Sadleir, Michael. *Trollope : A Commentary*. 1927. London : Constable, 1947.

Smalley, Donald. Introduction. *Domestic Manners of the Americans*. By Frances Trollope. New York : Vintage Books, 1960 : vii-lxxvi.

Trollope, Frances. *The Barnabys in America*. 1843. [http ; //www.yorkc.ca/johnbell/trollope/novels](http://www.yorkc.ca/johnbell/trollope/novels). 2008.

———. *Domestic Manners of the Americans*. 1832. Ed. Pamela Neville-Sington. London : Penguin Books, 1997.

———. *The Life and Adventures of Jonathan Jefferson Whitlaw ; or Scenes on the Mississippi*. Paris : Baudry's European Library, 1836.

———. *The Old World and the New. A Novel*. 1849. Chestnut Hill, MA : Adamant Media, 2005.

———. *The Refugee in America*. London : Whittaker, Treacher, 1832.

White, Edmund. *Fanny : A Fiction*. New York : Harper, 2003.

大井浩二「フランス・トロロプとアメリカ奴隷制度——『ジョナサン・ジェファソン・ホイットローの生活と冒険』」田中久男監修・亀井俊介＋平石貴樹編著『アメリカ文学研究のニュー・フロンティア』南雲堂, 2009年 : 87-102頁。

——名誉教授——